

0013 Salvador dali 021211

Salvador Dali ダリの画集を見ている。好きな画ではないので、若いころからじっくり見たことがなかったが、パラパラ眺めてみると、なかなかすごい画だなと述懐。象の足が伸び、虎が飛びこんで来て、時計がぐにやりと曲がる。下の図版の画も、ダリにしては普通の画だけど、トウモロコシとパンは何だろうね。こういう画には美術評論の学者先生、いろいろ意見を述べているのだろうが、興味がないので読まない。しかし、画を見ていると、色がきれいなあ、発想が面白いなあ、うまいなあ、ほれほれする。

ところで、ダリの私生活、TVか何かで聞いたが、ダリの妻“よそのおにいさん”が好きで、手に手を取って出て行って帰ってこないとか。その妻を恋焦がれて待つダリ。死んで帰ってきた妻を自宅の下に埋葬して、最後まで添い遂げたとか。男の鏡だね！！

0014 一休さん 071211

一休<栗田勇著を読んで>久しぶりに楽しい本でした。15世紀の頃の日本、足利義満がいたのだ。<一人荷担松源禅><自分独りで真の禅という重荷を担ってきた>と漢詩を書くすごい僧。その人が晩年盲目の美女、琵琶弾きの森女との恋愛。<美人陰有水仙花香><美人の陰に水仙花の香り>一休さんと童謡にも歌われ、漫画にもなり、馴れ親しんだ頓知の小坊主、一休さん、77歳のオジンになって、ベットシーン、邪淫の告白の詩だ。ぬけぬけと、こういうことが言えるとは・・・ウレシクナリマス。それと骸骨の話が面白い。当時は人間の死骸があちこちに有ったとか。<人は皆、骸骨に皮を被せたものにすぎない>というお坊さん、すごい！！著者が言うには「厳しい持戒修行者であると同時に、風狂とも風流ともいわれ、赤裸々な破壊者でもあった。そして一見、傍若無人な奇行と、飄々たる風貌とともに、清冽な詩人としての文芸の道を生きた。その生涯を一望することは難しい。その人生の内面的主観と外的環境との矛盾は、ほとんど想像を絶するものがあって、風とも狂とも、アナーキーとも言うしかない、激しい矛盾と、超克の軌跡であった」

一休さんの肖像を紙に描いて、横にオレンチの顔を描いてみた。いやあ、親しみのもてる顔だなあ。

0015 “シアワセ”考 101211

“シアワセ”とを感じる時

袋を開けて、そっと菓子を出し食べる“シアワセ”という。やっとな腰をかけてホッとして“シアワセ”という。

ふと考えて、“シアワセ”という言葉をおレ使わないねえ。いつもうまいものを食べば「うまい」という。いいものが手に入ると「いいなあ」という。「うれしいねえ」「おもしろいなあ」という。

あなたはどのような時に“シアワセ”と感じますか、というアンケートが載っていた。男も女もこんな時に“シアワセ”を感じると書いていたことは、みなさん些細なこと、ちょっとした事、他人から見たらしょうもないことを並べていたのには微笑ましい。なるほど“シアワセ”という言葉はいい言葉だ。照れくさいがオレも使おうか。人の顔の喜怒哀楽を描いてみた。がはは、みんな同じだ。

今の政治家は、選挙という勝負を戦っているだけと違うのか。今の経済家は市場に勝つことだけと戦っているのと違うのか。知識人種も芸術家人種も同じように、地位に、名誉に、金銭にと欲ボケしているやつが多い。オレの周りに、「何もいらん、人の“シアワセ”のために戦う」なんてやつ・・・そう、あなただ。本当のサムライだ。

#### 0016 一休さんの続き 141211

一休さんが言っている。「人とは、骸骨の皮袋」と。ほんとだね、よく言ったものだ。今の日本では人の骸骨が道端に転がっていることはないけれど、50年前、100年前には人が倒れて朽ち果て、骸骨になっていたなんてよくあった話だと思う。今でも世界のあちこちで、そのような事が日常だという場所がいくつかありそう。「ありそう」と他人事のように言わず、「なんとかしろ」「オレがなんとかしなければ」と言えない自分を自戒。今は、オレ道端で転がってもいいと思える人かな・・・。

人が自分のことを、自分以外の人のことを、考えて、祈って、想って、造るというような肉体的、精神的な動きは絶対に大切だ。何千年の人の歴史の中、自分が居るのは一瞬だけれど、一瞬だからそんな事をして仕方がないではなく、一瞬だからこそなくては。「オレは何だ。オレはどうすればいい。オレはお前の話を聞き、お前をわからねば・・・そしてオレは造らねば、想像しなければ・・・」一休さんの「人とは、骸骨の皮袋」という言葉の中に、どうせ死ぬのだから何をして仕方がない、というということではなく、どうせ死ぬのだから、それこそ力を込めて、ひとは考え、祈り、造らねばならない。一休さんの絵の中の骸骨が、ひとと同じように話し、笑い、踊っている。一休さんは何を言おうとしたのですかね。

オレも、チト、骸骨賛歌を描いてみた。

#### 0017 穂高フラフラ 151211

山の地図から、メモが落ちた。河童橋→岳沢ヒュッテ泊→紀美子平→奥穂高岳・・・とある。今年の夏、信州上高地から入って、穂高に登って、新穂高温泉まで降りてきた。毎年色々な山に行く中で、1,2回は「登った」と手ごたえの山がある。この穂高は、今年一番の楽しい山の一つだった。ただ12時間行動の重労働でヘロヘロだった。地図に載っている危険印には近づきたくないオレにとって、穂高は要注意の山。本当に危険印には近づきたくなかったが、行くと決めたら前向きに向き合おうと穂高に向かった。朝6時、岳沢(だけさわ)キャンプ場を出発。要注意の

山は緊張の連続、三点確保に四つん這い。人が落ちかけたり、デカイ落石があったりで、その都度、オレのデカイ身が縮む。てっぺんを過ぎて今日のキャンプ地、穂高岳山荘に2時についたが、夏の人気ポイントは人だらけ。「降りよう」と決断して、下りは始める。「これは一般道」と言うには、人もなく、道も荒れていて、またもや緊張の連続。

「テントを張ろう」と簡単にいうが、この山の斜面には、テントが張れそうな平らな場所がないのと、必需品の水が、飲んでしまって、ない。薄暗くなってきて、雨まで降ってきた。白出（しらだし）まで降りてきたが水がない。崖の下ではごうごうと流れているがとても降りられない。林道を1時間ぐらい歩くとやっと小さい流れ。そこで水を飲んで、ペットボトルに詰め、少し歩いた窪地で幕営。湯を沸かして、アルコールを飲んで、残り物を食べて、バタンキュー。8月、お盆の頃、澤山さんと二人の山行でした。

0018 アトリエ忘年会 211211

忘年会をやります。「6時より、アトリエにて、会費3000円」集まった方が10人足らず。飲み物はビール・ワイン・日本酒・ウイスキー・焼酎。食べ物は前日より煮込んだおでん、鶏鍋、チーズ・焼豚・カワキモノ。オレ“のみすけ”なので、集まる方もよく飲む。寒いのにヒヤ酒、ウイスキーに氷を入れたものに人気集中。元気な年寄連でしたが、次回からは40歳代、50歳代の方々も来て下さいね。机の上の食いもの、うまそうでしょう。

今回のゲストは、中年以降絵を始めた初心者の方々。「うまくなりたい」「最近迷っている」「描けてうれしい」と交々。白状しますと、オレ最近絵を教える事が面白くなって来ました。昔の先生は苦い顔で生徒と絵を覗みつけ、無愛想に一言二言。それではアカン、教える方も習う方も楽しまねばと考えて、みなさんの“いいところ”を見つけることにした。皆さんが描いている絵の中の“いいところ”みつけて、そこに力を入れて、伸ばしていくようにしている。それともうひとつ、大きな武器。パソコンの画像ソフトで「ここをこう直してみたら」というところを「こんな風に修正してみたら」と画像を見せる。口でいうより10倍理解できる。これは評判がいい。「うまい・じょうず、そんな絵はあきませんよ、そんなのは美術学校の1年生にまかせて、自分しか描けない絵、ほれぼれ楽しめる絵、ホッとさせる絵、しみじみ考えさせる絵を描いて下さい」といつも言っています。

よその教室を覗くと、ある教室では先生とそっくりな画を描くみなさん。ある教室では大正、昭和時代の雰囲気風景や静物を描くみなさん。絵も様々、先生も様々。習う人が描きたい絵を先生が理解して、人として楽しく時間が過ごせたら最高でしょうね。みなさん絵を描く事を楽しんでください。うちにも覗きにきて下さい。

0019 100年前 241211

友人がパリに行ってきたという。

いつもまっ先に行くマルモッタン美術館に行き、印象派展を見たという。

アンリ・エドモン・クロスという画家を発見したという。

「素晴らしい。浮世絵を感じさせる、海とか波に北斎を感じる。すっかり気に入った。」と彼。オレ、知らない画家だったが、美術館のHPを見たら出てきた。

その画像のいくつかの中に、え！と引きつけられたのが、マチスだった。「いいなあ・・・」

今日はもう一つ発見。八木重吉の詩だ。隣に在った金子光春が色あせる。

二つとも 100 年足らず前の作品。なのに、鮮烈。いい。

100 年と言ってから「アレレ」と思った。オレの子どもの頃の 100 年前は、明治維新だった。今の子供、100 年前は、太平洋戦争なのだ。不思議でもなんでもない。勘違いしているのはオレ。

「大都会で、1000 メートルも高さのあるビルに住み、エレベーターで、職場、市場、スポーツクラブ、飲食店、買い物と済ませられたら、無駄な時間がなくなってこんないいことはない、これがこれからの世界だ」とのたまう文化人氏。

ばっかじゃないか、そんな生活のどこがいい。人は生きるマシンと違う。そんな生活、な～んにも“ええもん”生まれんぞ。

0020 わが檻褸氏の話 281211

アメリカ在住の河合さん「うちの子どもの小さい時作った

figure の写真」と送ってくれた。オレンチのは、オレ作ですと大笑い。子ども作と思われるのはうれしい限りと自賛。(画像、左下が子ども君の作品)

figure を作りだして 2 年ぐらい。彼らを向かい合わせにして話をさせたり、楽器を持たせたり、天を仰がせたりしている。中西プロ「描いている絵の題材のように、自転車に乗せたり、車の運転をさせたり・・・」なるほどと、いろいろバージョンアップを考えております。

「なんだ これは・・・」

「きったないなあ・・・」

「やめてよ・・・」

数々のつぶやきが聞こえてまいります。とくに、同居人達は、大阪弁で攻撃してくる。

「絵も描かずに、何かごそごそやっていると思ったら、こんなナンニスルノ、全然ヨウナイヨ、アカンヨ」

「これはアンチテーゼ。世の中に警告する」なんて生意気なことは申しません。

「なにを、おぬかしか、この世の中、体裁ばっか、いいものが、はびこって、はばをきかして、おります。きらわれても、きたなくても、わが“檻褸”氏は、このスタイルで、語り、想い、叫ぶのだ」

いつまでもピカソの時代じゃないと毒突くが、何やら見ていると、ピカソの50枚刷ったリトグラフが、1枚800万円とは・・くちあめぐり、である。

檻褸とは、ポロギレという意味だけど、みなさん、この“檻褸”氏に、愛着がわきませんか、キラリと光るものを感じませんか。

0021 雪を踏みしめてきた 301211

4.5日前から、山に行きたい、比良に行きたい、比良が無理なら愛宕と思っていた。今年最後のごみを出し、溝を掃除し、愛宕に行く決心した。弁当、水筒、防寒具をつけて家を出たのが9時前。

陽が照って絶好のアウトドア一日よりだ。去年も同じような頃に愛宕に行って、右ひざを痛めた。たかが愛宕ではなく、裏から登る愛宕山はそれなりに手ごわい。どンドン林道を歩くが登山口がない。月輪寺の先と思っていたが、その手前だった。山仲間の衣川さんに「道を間違う人」と烙印を押されているオレ、またポカをやってしまった。地図を見ると、首なし地蔵から山頂へのルートがある。ま、なんとかなるさと、12時なので弁当。ご飯と野菜炒め、うまい。

京都は嵐山から清滝のトンネルをくぐると「寒い」と別世界。トンネルから2時間も歩くと雪がちらほら残っているし、降ってくる。人に会うこともなく登ると、首なし地蔵の辺りに一人二人。向こうのほうに愛宕山が見える。灰色の空にポコンと灰色。新雪の積もった尾根道を一路テクテク。去年と同様に水尾を回って帰りたいが、時間が許せるか・・。愛宕に2時前に着いた。そのまま早足で水尾方面に下る。

雪が降る、寒い、疲れてくる、腹も減ってきた。右手に保津川、トロッコの線路、人もいない、店もない、車が時々通るだけ。この辺りは京都市街に近が、自然がいっぱい、田舎だ、うれしくなるような景色。山また山が開発を阻止しているのかな。柚子の里という。柚子は風呂に入れるのと、料理にかける以外に何に使うのかな。ぼんずは？紀伊半島の白浜で、ぼんず用の柑橘類を買ったが何だったかな。

0022 今年を振り返るというニュースを見て 311211

今の日本の政治家は、政治というゲームを楽しんでいる。みんなマイクの前で、作戦を練り、戦略を考え、勝つ事を、負けない事を、得をする事を、好かれる事を話している。そういう政治家のようすを伝える様を見ていると、本当の悪はマスメディアかなと思う。マスメディアは、民主主義、言論、報道の自由を旗印に、人としての正義、本質、理想のすがたを主導してきた事もあ

ったが、最近のマスメディア、自分の都合で動き、話し、論評している。その自分の都合が鼻に付く。

オレこの年まで、民主主義・デモクラシーとデカイ題目を基本にして生きてきたように思う。「何でも言えた。何でもできた。災害はあったが戦争は無かった。金さえあれば何でも買えた」じつと立ち止って考えると、ほんまの幸せこれか、こんなことでいいのかと、自問。

中国の人権活動家、劉曉波は、中国の民主化や人権保護の改善を訴える意見書「零八憲章」を起草した。「国家政権転覆扇動罪」により、現在に至るまで監獄に収監されているらしい。

本当の理想体制とは何やろうね？中国もおかしいけど、今の日本もちょっとおかしいぞと思う。人は理想に正義に、自身の本道を歩むぞ、と燃えて人生を邁進するが、途中で金、名誉、地位が目の前にちらつき、それもいいかなと気持ちがぐらつく。

人生、ぐらつき、揺れる、左右にターン、何でもあり、これもいいかな。画像は最後の定点観測。